



東京大学図書

日共と戦争問題

特別
26
9291
1





序
 アメリカの社会学者ソローキンの計算によ
 ると、ヨーロッパでは一四〇年から一九四
 〇年までに四百六十年間に并六百萬回か
 かる戦争があったといふ。又内乱のほうでは
 紀元前六〇〇年から一九二五年の間に約千六
 百二十三件があげられるといふ。おいぶん戦
 争が起つたものだ。更にふしぎなことでは民主
 主義が隆盛し経済的に繁栄し科学や教育の盛
 んになつた時代ほど好戦的空氣がみなざり戦

第一章 序論

一、日本の産業の戦争と対運動

日本産業は戦争と対運動、軍事基地と対、地
 産地化と対を主要スロとして特有の端
 動をこころめていふ。これらの題目自体につ
 いては恐らく言れども不積成りではない。其産業はな
 りにこころについでとも「反対」である。うことを強く
 抑し去す。人は古い「常」にならばどのかの不
 平をもつていふものがある。今日の日本は敗戦
 のため生活窮乏し又いつまか戦後領土を失ふ

序論の
 本に照
 するに
 りては
 外に
 あり

はわれ／＼のようには日本民族の絶対独立を要
 求するたぐいに、^{他者の利益を犠牲にする}軍事的に
 もない。元来マルクスやレーニンの教義によ
 ると、共産主義者は戦争そのものを否定する
 ものでない。むしろ進歩性ある戦争は進んで
 行くべきであり、戦争のはじめは協定には
 いかなる反動的戦争でもなく、^{超然}と
 していけるはずである。戦争は最も
 中へ飛び込んでは、権力奪取の機会をにら
 むべきである。戦争は最も現実的な最も

烈しい政治の場面に
 のような独断的信仰や中世超民族のよ
 うな軍
 制存力の信仰を持ち、権力を過論し、暴力革
 命を肯定し、革命後には一人の自由をゆるさ
 ぬ独裁政治を主張する。自己目的とする
 、いつても戦争状態にあるような感
 じで狂信的
 に行動せねば居れない。党の、平常的秩序の崩
 壊する戦争時代を権力奪取の絶好のチ
 ンスと
 考へたり、権力奪取のためには戦争をも肯定
 するとはいふ。論理をもつに至るまでは、
 かくた

もなこことである。今日のコミン
 及びの隷属玉の共産主義者の甚か任務を武装
 斗争をあるとなし、むしろこれを最高の戦術
 として規定してゐる。武装斗争は内乱のこ
 とである。内乱よりは内戦にほかならない
 。共産主義者はたとへ平假としてゐるにせ
 よ、戦争を肯定するのである。
 日本共産党の戦争を呼号してゐる共産
 主義者は、そのは意外高
 を一おれつておく必要がある。それは意外高
 軍である。

日本共産党の戦争を呼号してゐる共産主義者は、そのは意外高
 を一おれつておく必要がある。それは意外高
 軍である。

日本共産党の戦争を呼号してゐる共産主義者は、そのは意外高
 を一おれつておく必要がある。それは意外高
 軍である。

一は日本からアメリカの軍力
 ちすことである。コミン
 は、日本共産党の当面の任務は社会主義
 なのではなくひたすら日本におけるアメリカ軍
 争力との斗争だと教訓し且つ指令してゐる
 。今日の共産主義者(教訓)は連を中心とし
 て組み立てられ、いゝ。日本にアメリカ軍
 力の存在するところ、連の極東政策、殊にそ
 の軍事的に眼上のコブのような種
 物である。それを追ひ押しは、ソ連の極東戦

ア	メ	リ	カ	納	税	者	の	負	担	で	何	億	ド	ル	か	の	経	済	振	
助	を	し	て	く	れ	、	そ	の	故	り	日	本	の	生	産	の	回	復	の	
助	け	ら	れ	、	日	本	人	は	恩	子	感	激	す	る	心	理	を	も		
つ	て	い	る	か	ら	、	か	よ	う	な	左	領	政	策	は	た	し	か	に	
感	謝	さ	れ	て	い	る	。	マ	ッ	カ	ー	サ	ー	エ	帥	が	喜	慶	し	
こ	い	る	及	未	感	情	な	る	も	の	は	上	記	の	分	額	の	う	ち	
ど	れ	に	当	る	た	ら	う	か	。	(1)	と	(2)	は	日	本	人	に	普	遍	
的	な	も	の	を	なく	こ	共	産	主	義	者	特	有	な	も	の	を			
る	。	(3)	と	(4)	を	鏡	敵	に	感	ず	る	人	は	少	数	の	大	多		
数	者	は	そ	れ	に	つ	い	ろ	は	漠	然	と	る	感	情	が	あ	る	地	

No.

り	と	す	た	ら	、	そ	れ	に	対	す	る	危	険	、	不	安	、	互	換
の	感	情	、	(5)	絶	大	な	生	産	力	を	も	つ	ア	メ	リ	カ	口	で
受	さ	ぞ	あ	つ	て	も	敗	弊	窮	乏	の	日	本	に	適	し	な	い	経
済	政	策	の	強	行	さ	れ	、	そ	こ	ぞ	然	お	こ	つ	て	く	る	
另	外	者	、	中	小	企	業	者	、	農	民	の	生	活	の	い	ち	じ	、
し	い	不	安	定	や	一	家	心	中	の	よ	う	な	想	刺	に	刺	戟	さ
れ	て	お	こ	つ	て	く	る	感	情	、	な	ど	に	合	款	し	ら	る	で
あ	ら	う	。																
で	ア	メ	リ	カ	古	領	軍	の	政	策	は	そ	の	い	か	如	く	寛	大
又	食	糧	危	機	を	察	つ	て	く	れ	た	ら	り						
毎	年																		

二 我々も又対峙を
 向題と(実)運用して
 あり、大衆の間にこれに
 や又対峙を階級のわき
 点や意味不明の間に
 人はドワダライシの功
 をもつていよ。アメリ
 なるものを取るに定ら
 はそれを知るのしむる
 二 我々も又対峙を
 向題と(実)運用して
 あり、大衆の間にこれに
 や又対峙を階級のわき
 点や意味不明の間に
 人はドワダライシの功
 をもつていよ。アメリ
 なるものを取るに定ら
 はそれを知るのしむる

い。敗戦窮乏の
 もろろんやとあるけれ
 融け古蹟の志向とし
 の強行も困る。マエ
 米密陸原るものありと
 ライン。可う直接に生
 読感。可うあること
 二 生活はつねに理論
 。アメリカ文化を憎悪
 い。敗戦窮乏の
 もろろんやとあるけれ
 融け古蹟の志向とし
 の強行も困る。マエ
 米密陸原るものありと
 ライン。可う直接に生
 読感。可うあること
 二 生活はつねに理論
 。アメリカ文化を憎悪

刻な様相を呈してくるのであらう。
 情とドツヂライン
 恐怖感情をさすびつくると深
 けるといふ「史」上の教訓はあ
 る。そのうしと惑
 たいで其おの民衆の民族的誇
 りの感情を傷つ
 たる古領軍でも外口には長く滞
 在すればそのこと
 三、
 戦争は惨虐な暴力であり物質
 的大破壊であ
 るにしろも「史」の進歩を促
 進する役割を演じ
 たことの長しかにあ
 るのはマール
 スやレニ
 ンの言ふ通りである。し
 かし、
 二、
 ン
 の言ふ通りである。し
 かし、
 二、
 ン

非自共的なるものがある。しかし
 生活に直接す
 るものであるだけに根強く
 なる可能性はある
 。共産党は巧みにこの心理を捕
 へておる。春
 秋の筆法を以てすれば共産党を
 して名をなさ
 しめるものにはドツヂライ
 ンである。とんないに寛大
 以上のように見てくれれば
 マ元帥憂慮すと信
 へられる。母を人の子と
 未熟情なるものはまだ
 う根深いものがない。自
 共的なるものというよ
 リもあしるドツヂライ
 ンによつて融共された
 非自共的なるものがある。し
 かし、生活に直接す
 るものであるだけに根
 強くなる可能性はある
 。共産党は巧みにこの心理
 を捕へておる。春

封建制度を打破する進歩的役割を演じた。ア
 メリカの南北戦争は奴隷制的農業を打破
 してアメリカに工業的資本主義時代を確立す
 るものだった故に進歩的意義をもつてい
 明派誰れにかける討幕戦争は日本の封建制度
 を終焉させた。進歩戦争だった。日清戦争は中
 国の反動の支柱たる清朝統治を動揺させて新
 しい中国の胎動を可能ならしめ、いはゆる中
 西的停滞性にメスを入れた。いって、了了の保守

主義を崩す端緒となつたといふ進歩的側面も
 ある。
 しかし戦争の破壊力があまりに増大しすぎ
 たのが今日の現実である。原爆水爆等の超科
 学兵器の偉力は戦争の進歩性を吹き飛ばし
 してしまふ悪魔的作用をする。戦争は元来人
 類の競争形式の一つである。競争は人類進歩
 の動力の一つで、競争の死滅した社会は寂寥
 たる風景を呈するであらう。しかし戦争はも
 はやその破壊力の増大の故に競争形式として

の進歩性を決つてきたのである。戦争に代る
 競争形式が^見たれ物ばならぬ時機可らずに
 来ている。しかし共産主義者の戦争能辨否定
 者となつたら思はれない。レニンの戦争
 理論の訂正をこころみたら共産主義者はま
 い。かれらは共産主義を實現するための
 レタリ了不際戦争を最後の戦争として肯定す
 る。最後の戦争があるかそれと是認するか
 ありに^{おいて}やはり戦争否定者^でなく^て肯定
 者^かある。

かつて石原莞爾氏の世界最終戦といふこと
 を唱へた。これは武器の生産の面からの観
 念であつた。しかし及勤の要因を除去して人
 の進歩を實現するため最後の戦争を是認す
 るといふ思想は昔から敵多^くある。キリスト
 教は^{いかに}この口實^も用ひられたこと
 であらう。回教民族におい^{ても}そこであつた
 。^{。 戦}闘的哲学者フイヒテはカント哲学の^後記
 者^であつた。カントの永久平和論に^暗に反
 対して、^{。 理}性的道義不家^を實現する^ため^の戦争

争の不可解で、あるといふ理論をその「封鎖的
 商業口家」のなかで述べている。近頃は「一
 次」二次の世界戦争は民主主義の名の下に行
 はれ、一つの民主的、女界を實現するといふ約
 束を結ぶ。今はさうした口実や理念や期待が
 人を魅了するものとあつた。なつた。再三
 次、女界戦争の大破壊力の豫想の方がはるかに
 人に訴へる。心理的にも平和主義の方が大衆
 的となりつつある。かような時代には戦争
 の進歩性の概念に執着する者は單なる暴力嗜

好者に墮落する危険をもつ。
 日本は完全な無武装国となつたか、多くの
 兵は軍備の縮小どころでなく大擴張の行は
 れて、いさ。アメリカの今年の軍費は百三十
 九億ドルで、全豫算の三五%以上で、り、莫
 俾との他の北大西洋同盟加入諸国全部の軍
 費は約五十億ドルに及ぶ。その三倍の軍
 備である。リ連は五億の一八%を軍費に使
 つて、いさといはれる。最も平和主義思想をも
 つて、いさといはれる。最も平和主義思想をも

タン両玉はそれ／＼全世界の五〇%を軍費に
 使つてゐる。隣国の中からは四百五十人の巨大
 な軍団がある。戦争はちよつとしたきつかけ
 のうでもはいまりうる。戦争をはいめる方が
 真に永続的で民主的な平和を確立するよりも
 ちよつとやさしい。二十世紀はなほまた大戦争
 の世紀であることをやめたい。しかし
 されば通ずるといふ言葉の如く平和のモメント
 はこの時代よりも大衆の生活と直接にむすび
 合つて根強くなりつつある。かような新し

四
 一史のモメントを正しくつとめとらねばなら
 ない。それらは最後の戦争という思想それ自
 身をやりゆねたなうない。最後にこれだけとい
 う戦争しやつたなうない。共産主義者の共産
 主義実現のための最後の戦争だけは肯定する
 といふ立場をとる限り、これらは真の平和を
 義者でなく、一史の新しいモメントとして成
 立しつたある平和の要因に首目なる者である

生産主義の戦争への理念や態度の批判であ
 リ、又われわれの暫定的要求たるものを次に
 記さう。
 一、われわれは最後の戦争、戦争を絶滅す
 るための戦争なるものを否定する。いかなる
 戦争であれ、戦争そのものを決して再び地上
 にあらしめないことを要求する。人類の待望
 久しかつた平和の現実性を得てきたことを確
 認してその実現に努力する。左如し平和とは
 人同世界における力の急義や競争の急義を以て



を否定するのではない。左如し従来に如し戦争手
 段の止んぬ状態を平和というのである。
 二、われわれは世界政治の圏外に逃避して
 日本人向けの安全を語うというふうな臆病な利
 己主義をとるものではない。そんなことはでき
 ることではない。平和は戦争と共に現代の世
 界政治における生きた要因である。平和を力
 なくしにば得られぬ。世界政治の荒海のなか
 ら戦争的な米ソの外に平和を要求する国々を
 結合し能動的活動を通じて平和の實現に努力

窮乏の口にはどれのの富裕なふ、どれのの強	大存口に依存しようとする氣もちをもつ者を	生じやすしい。しかしどんな問題にあふらばも	つとて大切なりは自主性を確保することであ	る。それの原初的な条件である。どれであ	の外力のお先棒をかついで戦争するのを唱え	かゝるも、それはその主人に奉仕する手段にす	ぎな。ワシントンにもあふれモスクワにも	あふれと、う態度が必要である。敗戦は必ず	には困難の山のようである。こここで自主性の
----------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	-----------------------	---------------------	----------------------	-----------------------

男	さ	三	ど	ど	利	相	惱	あ	あ
平	る	、	女	女	己	不	み	る	了
私	態	了	る	り	的	下	を	。	マ
の	度	マ	。	、	不	な	。	。	リ
た	を	リ			永	い			カ
め	と	カ			世				に
に	る	に			中				も
た	者	も			之				従
た	こ	從			を				屈
か	そ	せ			預				か
ひ	真	が			い				の
う	に	の			如				連
る	日	の			さ				に
る	中	を			は				も
る	を	愛			空				從
る	し	且			虚				屈
る	且	つ			を				せ
る	つ	母			幻				
る	母				想				

戦争は心のかけでなく、社会経済的諸条件
 (資本主義下では市場競争)の矛盾から必
 然に発生する予備がある。故に真に世界平
 和を實現するに、社会経済的諸条件を改革
 するに、とは不可分の関係がある。それは社
 会主義の外にない。世の平和論者には世界政
 治とが世界法との必要を唱道する人の多く
 一最新のエレメンタリー・リクスの一平和の
 解
 析の如きに至るまで、あつて、おれら
 社会主義にたいして多くふれるところはない。

心の革命のかけは實現である。何となれば
 四、世界平和は、ネスコの唱道するやうに
 五、日本の新しき運命の必要となる。中
 に、おれらには、なほない。この意味を、イン
 六、おれらには、なほない。この意味を、イン
 七、おれらには、なほない。この意味を、イン
 八、おれらには、なほない。この意味を、イン
 九、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十一、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十二、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十三、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十四、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十五、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十六、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十七、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十八、おれらには、なほない。この意味を、イン
 十九、おれらには、なほない。この意味を、イン
 二十、おれらには、なほない。この意味を、イン

の奥に燃えつづけたい原初の衝動である。
 競争は不定さるべきでない。しかしその表現
 形式として競争はもう古くなつたのである。
 共産主義は戦争の絶対不定にまで到達してこ
 ない。その理論的根源としてこのマニウス、し
 ニンの世界観や戦争観はすこしも訂正され
 ておらず、依然として神聖な教理をなして
 いる。かれらの今日の戦争反対論は、共産主
 義実現の最終戦のための中休みのたものである。
 り、修繕であり、それは戦争挑発

てもありうるのではある。真に世界平和をこ
 めたい者は、共産主義者の戦争論の真実を知
 りたい。そのためには、これよりマニウス
 ンンの文献についてこれらを検討する。

